



TITLE:

東一條通信

AUTHOR(S):

CITATION:

東一條通信. 天界 1928, 9(93): 79-83

ISSUE DATE:

1928-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161348>

RIGHT:

東 一 條 通 信

此の秋は我が京都に御大典の挙げさせられる時機でもあるから、殊の外忙しいだらうとの豫感があつたが、事實ば豫想以上に多忙であつた。七八月中、堺市に人を避けてゆつくりと讀書しやうと思つたのに、其の時にも既に御殿場や倉敷へ出かけねばならなかつた。九月に入つて、京都の宅へ歸るや、間もなく仙臺へ出張した。仙臺での仕事は、かねてから東北大學の大久保教授に御願ひして置いたモル式測微光度計で天體寫眞の若干を研究するにあつたのだが、之れに就いては仙臺に滞在中の一週間、大久保教授と濱田理學士とに大變な御厄介になつた。大久保教授とは實に十三年ぶりの邂逅である。研究の合ひま合ひに盗むほきの僅かな時間を捕へて、京都の話、ベルリンの話、家の話、人の話など、いろいろ話をした。濱田理學士は今度始めて知り合ひになつた學者であるが、毎日毎夕、實に忠實に、まめまめしく、御自身の研究であるかの如く、熱心に助けて下さつた。熱電對が時々狂つて感度が鈍つた時など、誠に御氣の毒に感じたが、しかし、理學士は細心に、又、勇敢に、此の精密器械の局部分解検査によつて此の難關を切りぬけられた技能を、感服せずにはゐられなかつた。

仙臺に滞在中、舊知松隈中村兩君、及び其の他の教授たちにも御目にかつた。諸君に誘はれて向山の天文地球觀測所へドライブした午後も愉快であつた。向山の赤道儀は十四年前に一度見たところがある器械であるが、其の型式や細部は記憶に無かつた。こんど見て、之れが昨年奉天の西岡氏宅で使つたツアイス型で、只、形は奉天のものより僅かに大きいのである事を見、一種のなつかしみを覺えた。

仙臺で、或る日、大久保氏と共に松隈氏方へ招かれて、晚餐を供せられ、一夕の歡談を楽しんだのも嬉しかつた。

仙臺には九月二十八日から十月三日まで居た。—— もつと早く行きたかつたのだが、二十六日には近江の琵琶湖上で久邇大將宮殿下を主賓とする觀月會に招かれ、「月」に關する御前講演の約があつたため、止むを得なかつた。二十七日朝東京に着いて、池袋の自由學園に招かれ、一席の講演を

したこゝ、其の日の午後、東京支部を訪れて、後藤氏の望遠鏡により、稀代の黒点を太陽面上に見た。こんなプログラムで、東京の一日も可なりあはたゞしかつた。そして此の夜仙臺へ立つたのであつた。

九月二十九日の土曜日から翌日々曜へかけて、水澤へ行つた。二晩、川崎技師宅に泊つたが、日曜日には山崎技師や池田技師と可なり話した。殊に此の日の夜、空が幸ひに晴れたので、池田技師に助けられつゝ、プラン會社製の精密子午儀でトランシト觀測をやつた。初めての器械で、殊に調節する部分の多い器械であるため、可なりまごついたが、こにかく一通り此の器械の特徴を會得した。此の器械は、先年、(1924年11月14日)バリのプラン會社で製作されてゐる最中に、ちようご同社を訪れて、見せられたものであつて、特別な親しみを感ぜさせられる。(「天界」第55號第297頁)——十二年ぶりの水澤の夜の空もなつかしかつた。

仙臺から歸りに、十月四日の朝、東京へ着き、池袋の佐藤氏方で一晩泊つた。此の日、大小兩佐藤氏と宗教論などを中心として久しぶりに快談したのも嬉しかつた。翌五日の特急列車で京都へ歸つた。六日に東京府のために講演をするやうに五藤幹事からの傳言もあつたけれど、京都での急用を思つて、府の依頼を又の機にゆづり、歸洛したのは、五藤氏にも氣の毒の至りであつた。

京都へ歸つて暫く、仙臺での研究事項の整理やら、花山天文臺の建築やら、新らしく「太陽物理學」の講義を始めるやらで、やはり多忙であつたが、まもなく日本學術協會の總會の日も迫つて來たので、十月十九日朝、九州へ向け京都を立つた。夜九時に關門海峽を越え、同十一時博多驛に着くまで、十六時間ぶつ通しの汽車旅行は可なり疲れたが、博多で内海幹事に迎へられて宿に案内せられ、取り敢へず九州でのプログラムを聞いてホツと安心した。

學術協會總會は翌二十日九大法文學部ビルデングで開かれた。つい朝ね坊したため、開會式場へ入つた時には十時近くであつたが、會衆は案外に多くて、中々盛んらしく見えた。此の日、十一時から中村清二教授の「結晶學と數學」は興味深い講演であつた。

會場のすぐ北側の食堂で荒川川村兩教授と共に午餐を取つたが、其の後、恰も來會してゐた東京大學の兩宮博士と、九州大學の宮崎博士とに會ひ、歡談した。兩氏は、今から十八年の昔、三高卒業以來、絶えて會はなかつたので、話は何時まで盡きなかつた。此の日、又、長崎造船所の佐々木技師にも會つた。之れも十八年ぶりであるが、會へば忽ち昔時の舊情に歸る。實に朋友といふものは好いものである。

此の日、午後四時半から市内の東邦電力會社に招かれて、「天文と人生」と題する講演を試み、それから六時には在住同好會員の晚餐會に臨み、次いで七時からは同好會主催の公開講演會に「宇宙の探訪」を講演した。會衆は約七百であつたが、會場は音聲の反射少なくて、話し易かつた。幻燈畫も成績は見事であつた。

翌二十一日は學術協會の第一部講堂で一論文を読むため早く宿から出かけた。論文題は「彗星光輝の問題」であつて、順番は此の日の第三番目に當り、主として昨年奉天で撮つた井ノネケ彗星の寫眞板を、先頃仙臺の大久保教授研究室でモル式光度計によつて測定した結果を幻燈によつて示し、一般に彗星の光輝がまことに觀測されるのは望遠鏡の倍率に由るものであるとの考へを證明したものであつた。

此の日、午餐を舊友千田民衛氏一家と共にし、後、見送られて猷修館に行き、學生及び一般市民のために、午後一時半から「太陽と其の黑點活動」を話した。之れには内海氏や兩小林氏が種々世話して下さつた。

晩食後、六時から半時間、J.O.H.K.の福岡演奏所で「天體よりの無線通信」を放送した。そして之れが済むや否や、汽車で戸畑に行き、明治専門學校 Y.M.C.A.の諸君に迎えられ、一同、室住教授の宅に集まつて二時間以上も話した。それから十一時半に又、驛に引き返し、長崎までの寢臺列車に入つた。

長崎は全々始めての土地であるが、汽車が朝七時に着くや否や、報時觀測所の有田技師と、造船所の舊知佐々木技師とに迎えられ、直に自働車で市の内外を案内された。見せられたものは多いが、中にも浦上の大きい天主堂、シーボルトの舊跡、諏訪神社公園などは忘られない。最後に大浦の

天主堂の側から鍋冠山々腹の報時觀測所に上つた。有田技師の御親切によつて觀測所の内外を精しく見せて貰つたが、小じんまりとした此の學問役所の空氣は、落ち付いて、眞に世を超越してゐる氣分が愉快であつた。前庭から見る港内一帶の景色は何時まで飽きない。正午近くなつたので、タイム・ボール落下の實演を見、それから佐々木技師に導かれ、港内ランチに乘せられて造船所側にわたり、技師邸に誘はれて午餐を供せられた。其の後、二時半發の汽車まで見送られて佐賀へ向け出發した。

佐賀では今夜、縣教育會主催の講演會に臨んだ。荒川文六博士が日本學術協會の名を以つて座長をつとめられ、ついで「火星の消息」の講演を幻燈畫に據りつゝ四十分ばかりやつた。其の後、川村多實二教授の講演があつた。

次の日二十三日は、約束の如く、早朝佐賀の宿を立ち、十時に三池中學を訪ひ、校長や古賀幹事に迎えられ、全校生徒に天文講演をした。それから午後一時には案内されて、市公會堂で市民一般のために講演した。

晚餐後、五時過ぎ、見送られて熊本行きの汽車に乗り込んだところ、恰も學術協會の見學團第三班と同車するこゝとなり、倉敷の板野博士、仙臺の中村博士等と話した。

六時半熊本着。山本幹事等に迎えられ、宿で少憩後、九州新聞社へ案内せられ、七時から其の樓上で天文講演をした。集まつた人は約五百、前後二時間あまりの間、皆熱心に聞いてくれた。只、幻燈設備の無いのが残念であつた。——閉會後、たま々持參された珍らしい月球圖を見た。約百年前の一篤學家が「星鏡」によつて月面を覗きながらスケチしたものらしく可なり正確で、又、精密であつた。西洋のメドラーに匹敵するもの、しかも時代は其れより古い。我が邦人の理學的才能の優秀なことを證するに足る逸品である。高木主幹に寫眞複寫を依頼して辭去。宿に歸り、有志と暫く雑談。十二時頃ちよつと眠り、翌朝五時、急行上り列車に乗り込む。

歸洛途上、二十四日正午頃、約束により小郡から惠藤幹事が同車され、徳山まで約一時間、いろいろ話した。山口で見つかつた小隕石のこゝ、教授用の星圖のこゝ、その他。

午後三時、廣島に下車。高等師範の學生に迎えられ、直ちに高等學校へ行き、集會所で YM の三校聯盟の諸君と懇談晚餐。七時から高等工業校の講堂で、主に學生のために天文講演をした。此の機に野村、鈴木、中原三教授に御目にかゝつた。此の夜十時、京都行の列車の寢臺に入る。

二十五日、歸洛して見れば、もはや同好會總會が近づいて來てゐる。フト、都ホテルへ電話をかけて見ると、米國から來遊してゐるクラムプ博士が既に神戸へ出張したといふので、大に残念に思ひ、早速、オリエンタルホテルへ電話をかけた。夜八時頃、幸ひ博士と電話が出來て、明朝こちらから往訪する約束をした。(クラムプ博士との會合は別頁記載の通り。)

米國の萩原氏より來信

東京天文臺の萩原助教はロツクフェラー研究生として米國ハーバード大學に研學するため、去る九月十五日横濱を出帆する President Taft 號で渡米されたが、同月24日、先づ初めての寄港地プクトリアに上陸、山本一清教授の照會狀を持つて、同地の有名な天文臺を訪問された由である、下記は同氏より山本教授へ送られた手紙の一部である。

山本先生

たゞ今、天文台を見て参りました。ハーバー博士に案内して頂きました。プラズケット台長は居られませんでした。ハーバー氏は「山本さんによるしく」と言つてゐられました。いろいろ御世話になりましたこと有り難う御座います。厚く御禮申します。

船は夜明けに着きましたので、朝食後、早々自働車で参りました。ちようどハーバー博士が出られたところなので、三十分ほど見せて頂きました。二時間足らずで全部をすませました。今十時ですが、これからすぐ出帆してシヤトルに向います。

何卒御大切に

萩 原 雄 祐

九月24日

ちなみに、同氏はハーバード大學の數學教授バーコフ氏(「天界」第85號第186頁にバーコフ氏來朝當時の記事あり)の所で、天體力學を研究せられる筈である。